

平成 22 年 0 5 月 1 4 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520489
 研究課題名(和文) Eメールによるライティングコミュニケーションの日独対照研究に基づく
 教材開発
 研究課題名(英文) Creating teaching materials by comparing E-Mails in German and Japanese
 研究代表者 ハーティング アクセル (HARTING AXEL)
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授
 研究者番号：80403509

研究成果の概要(和文)：

本研究の目的は、ドイツ語と日本語の依頼の Eメールの構造を比較することである。本研究のために、ドイツ人と日本人の学習者によって書かれた 200 の Eメールを実験デザインによって収集した。そして形式的、構造的、言語的特性に基づき Eメールを分析した。本研究の質的な結果に基づいて、ドイツ語学習者が目標言語においてより適切に依頼を書く手助けとなる教材を作成した。

研究成果の概要(英文)：

The aim of this study is to compare the composition of German and Japanese request emails. The 200 emails under investigation were written by German and Japanese students and were collected in an experimental study. They were analysed according to their formal, structural, and linguistic properties. The qualitative results were used to create teaching materials that may assist GFL learners to write requests in the target language more appropriately.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：(1) ライティング (2) Eメール (3) 語用論 (4) 比較言語 (5) ドイツ語教育

1. 研究開始当初の背景

Eメールで依頼を行う場合のような、書き手と読み手の関係を危うくする可能性が潜在的に存在する発話行為において適切な言葉遣いは重要である。日本語とドイツ語のEメールの比較において用いられた方法論的アプローチは、テキスト言語学とポライトネス理論の領域における数多くの研究から影響を受けてきた。先行研究は、口頭における依頼の遂行における異文化間の差異を明らかにした (Blum-Kulka, House & Kasper, 1989)。そして、日本語のポライトネス構造が、欧米の言語とかなり異なっているということが指摘されている (Matsumoto, 1985; Ide, 1989)。

2. 研究の目的

Eメールで依頼を行う場合に、適切な言葉遣いをするというのは、たとえ母語話者であっても容易なことではない。まして、丁寧さを表す仕組みが、母語のそれと明確に異なる外国語で表現するとなるとなおさらである。本研究では、とりわけ、日本のドイツ語学習者が、ドイツ語でEメールを書くにあたり、依頼のような潜在的に相手のフェイス(face)を脅かすような発話行為を、いかに軽減するかが問題となる。全国のドイツ語学習者を対象として、2005年に筆者が実施したオンラインアンケートに従うと、日本の大学では、口頭表現能力を育成するための筆記能力の向上がなおざりにされている。とりわけ、この筆記能力という点では、ドイツ語教師たちは、学生が文章を書く際の文体上の問題や転移による訳の誤りを非難し、方法論的な援助や資料の不足を訴える。そこで、ドイツ語と日本語の模範的なテキストおよび発話行為を対照的に記述することにより、必要とされる言語学的基盤の構築を図るとともに、このような対照研究に基づいた教材を作成することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

経験的な調査に基づき、ドイツ・日本それぞれ100名の学生にEメールを書かせ、計200通のメールからコーパスを作成した。Eメールは、複数の状況的コンテキストに対して記述され、対照語用論の見地から、形式的、文法的、内容的な特徴を分析した。その際の評価は、記述統計の手法に依った。

被験者は、Bielefeld 大学と広島大学の学生それぞれ100名で、ある依頼をするという設定のもと、実際にEメールを書いてもらった。学生には、自発的な参加を呼びかけ、参加した者には報酬を支払った。Eメールを書くうえでの状況的な変数としては、まず、大学というコンテキストに絞ったうえで、Brown/Levinson (1987)によって提唱された支配力、距離、負担の程度を基本とした。デジタルで作成されたテキストデータは、いくつかの分析段階をふまえ、形態的、内容的、文法的な特徴に従って体系的に調べることにした。まず、形態的なカテゴリーに従った分析として、とりわけ文の長さ、段落の置き方、ならびに絵文字のようなテキスト外の特徴を調査・記述した。続いて、内容的な構成要素に従ってEメールを区別し、それに相応するそれぞれの文を個々の表に転記した。デジタルで作成されたテキストデータは、いくつかの分析段階をふまえ、形態的、内容的、文法的な特徴に従って体系的に調べることにした。内容分析において用いられたアプローチは、Mayring (2003) が構造化 (*structuring*) と呼んでいる手法に基づいている。この手法は、既に定義されたカテゴリーを体系的に抽出することで、データから特定の内容構造を得ることを目的としている。本研究のために定められたカテゴリーは、Eメールを構成している個々のテキスト部分から成る。ヘッダーには、そのEメールの件名が挙げられる。また、テキスト本文は、冒頭にあるあいさつと最後にある結びのあいさつから成り立つものが多い。さらに、それらの間には、依頼をサポートするテキスト部分が (依頼そのものの隣に) 書かれることがある。例としては、*依頼の理由*や*依頼によって暗示される潜在的な負荷に対して気遣う表現*、読み手が依頼を承諾するだろうことに対する*謝辞*や*埋め合わせの約束*などが挙げられる。これ以外では、*読み手または書き手に関係したテキスト部分*という、依頼には必ずしも触れない部分がある。これらのカテゴリーに分類される項目は、Eメールからコピーされ、類似した分析表へと貼り付けられた後、内容的および言語的な分析がなされた。

4. 研究成果

ドイツ語と日本語の依頼のEメールの分析結果は、その構成の方法におけるいくつかの興味深い差異を明らかにした。ドイツ語の依頼のEメールは、ドイツ語において手紙を書く際の慣習を忠実に守る傾向があった。つまり、初めに読み手への呼びかけの言葉、そして終わりに別れの言葉があり、書き手の名前前で終わるといったやり方が決まっているということである。この点では、日本語の依頼のEメールは、あまり縛りが無いようである。あいさつや別れの言葉における慣用表現は、ドイツ語のEメールではしばしば見られるのだが、日本語ではむしろ珍しい。同様に、呼びかけの言葉において、読み手の名前を書いたり、結びに書き手の名前を書いたりすることも強制されないようである。

読み手または書き手に関係したテキスト部分に関しては、ドイツ人は、彼らの気持ちや最近のできごとについての個人的な記述をしたり、読み手へ質問したり、幸運を祈ったりすることで、読み手との関係を強調する傾向にある。このように、読み手と書き手の関係を強調することは、日本語では非常にまれである。その他の量的な違いとしては、読み手の負担を気遣う表現や謝辞といった、依頼の負荷を最小限にする機能を持つような発話行為の使用が挙げられる。ドイツ人は、謝辞を多用することによって、依頼された行為に対する感謝の意を表する傾向がある。一方、日本人は、読み手を気遣うことで負担を認識しているということを表すことを好む。

依頼、謝罪、謝辞というテキスト部分を手がかりとした具体的な本研究成果は以下の通りである。

依頼

本研究で考察した内容的カテゴリーは依頼のやり取りのみであり、分析にあたっては特に、依頼の発話行為を遂行するために導入された、異なるストラテジーの分析が中心である。その際、Blum-Kulka et al. (1989:18)によって提唱された9つの依頼ストラテジーを、本研究では6つに絞った。

「本を貸して下さい、本をお貸し願えますか？」のような *directives* というストラテジーに該当する依頼では、依頼表現あるいは命令形によって、その発語内的力が示唆される。「本を貸してくれませんか」のような、筆者が *locution derivable* と名付けたストラテジーには、発話の命題内容に基づく

だけで、発語内的力が明白であるような依頼が属する。「本を貸してほしいんだけど」のような *want statements* においては、書き手は、願望や欲求を表現する。「本を貸して頂きたいんですが、いかがでしょうか？」のような *suggestory formulae* というストラテジーでは、依頼がひとつの提案として表される。「本を貸してもらえませんか？」のような *query preparatory* では、依頼の実行に必要な状況が述べられ、この場合、大抵は依頼を実行するための被依頼者の能力や態勢が問題となる。最後に、「君が持っているX-本があれば助かります」のような *hints* とは、依頼か否かの解釈を聞き手に委ねるストラテジーを指す。

個々のストラテジーの順位を見てみると、両言語において、*query preparatory* が最も好まれるストラテジーであることがわかる(ドイツ語 66.9%、日本語 58.9%)。日本語では、分析対象とした依頼の半数以上、さらにドイツ語では、3分の2以上がこのストラテジーにあたる。日本語では、*want statements* が2番目で、全体のほぼ4分の1 (21.0%)を占めている。ドイツ語における *want statements* はたった4.4%で3番目の位置である。ドイツ語の2番目は *directives* で全体の18.4%を占め、それに対し、このストラテジーは、日本語では *suggestory formulae* (各4.0%)とともに最下位である。*locution derivable* は、日本語で11.3%であるのに対し、ドイツ語では4.4%しか現れない。*suggestory formulae* は、両言語でほとんど見当たらない。日本語では全体のたった4.4%、ドイツ語では2.2%である。最後に、*hints* とみなされるものは、ドイツ語で3.7%、日本語で0.8%であった。

謝罪

依頼の負荷を緩和するために謝罪することは、日本語においては、非常によくあることだが、ドイツ語においては、ほとんど用いられない。日本語のEメールの88%が、多くの場合、依頼の前に1つまたはそれ以上の気遣う言葉を含んでいたが、ドイツ語では、15%が様々な位置に含まれているだけだった。また、「悪いんだけど先生に行かない事を伝えてくれん?」にあるように、日本語の弁解の44%が、依頼と統語的に接続されている。一方、ドイツ語において、統語的に接続されていたのは、「*Ich weiß, dass du viel beschäftigt bist, aber es wäre wirklich wichtig!*」[あなたがとても忙

しいということは知っているのですが、これは本当に重要なのです。]«のみだった。

特に、日本語の謝罪は、多くの場合、当該発話行為を遂行して申し訳ないのですがというような、発語内力指示装置 (Illocutionary Force Indicating Devices, 以下 IFID) を含んでいた。具体的には、日本語の E メール の 75% が IFID を 1 つ含んでおり、21% が 2 つ以上の IFID を含んでいた。日本語では、そのような言葉が非常に多く、その使用は、»ほんまごめんね！！！！(>_<*) (J2) から»誠に申し訳ないのですが、(J3.4) に至るまで、受信者や依頼の場面によって決まる。ドイツ語では、E メール の 4% のみが、IFID を含んでおり、»entschuldigung *das ich dich einfach so anschreibe* [E メールでお知らせしてすみません]«にあるような名詞、または»Für die Ihnen entstehenden Unannehmlichkeiten möchte ich mich schon im Vorfeld entschuldigen. [これからかけるだろう迷惑に対して、先に謝っておきます]«にあるような動詞によって実現されていた。

日本人の 35% と、ドイツ人の 5% が、»ich hoffe es ist ok, dass ich dir einfach so maile. [この E メールを送っても大丈夫だったらよかったです]«や»突然のメールをすみません。«のように、E メールを送ることに対して気遣っていた。日本人の 16% と、ドイツ人の 5% が、»Ich hoffe, es macht nicht zu großen Aufwand [これらがあなたにとって重荷にならなければよいのですが]«や»ちょっと迷惑かけそうなんだけど、«のように、迷惑をかけるという一般的な行為に対して気遣う言葉を記述していた。その他には、日本人の 26% と、ドイツ人の 1% が、時間をかけさせることで迷惑をかけるという行為に対して、より具体的に気遣っていた。日本語では、多くの場合、»[お忙しい中、邪魔してすみません]«にあるように、お忙しいという言葉で実現されていたが、ドイツ語では、唯一、»Mir ist bewusst, dass Ihre Zeit knapp bemessen ist [あなたに時間があまりないということは知っています]«のみが見られただけだった。

このような量的な差異に関して、読み手の負担を気遣う表現がドイツ語ではあまり一般的でないということと、慣用表現を母語から訳すことを控えるべきであるということ、ドイツ語学習者は意識させられるべきである。日本語における謝罪は、しば

しば感謝の気持ちを表すために用いられるためドイツ語学習者は、ドイツ語では感謝や謝辞の表現がこの機能を代わりに遂行するというのを教えられるべきである。

謝辞

謝罪とは対照的に、感謝を表す表現は、日本語よりもドイツ語の方がより一般的に用いられる(ドイツ語:78%, 日本語:20%)。ドイツ語では、謝辞は通常、E メール の最後の方に置かれる次の連絡に関する言及の前後どちらかで見られた。しかし、日本語では、謝辞の好まれる位置は特に認められなかった。謝罪と同様、謝辞は、»Es wäre schön, wenn Du das für mich erledigen könntest. [あなたにこれをしていただくと、有り難いです]« or »目を通して頂けると嬉しいです。«にあるように、依頼と統語的に接続されることが多い(謝辞全体において、ドイツ語:26%, 日本語:41%)。ドイツ語による感謝の言葉の 52% は、»Vielen Dank schon mal [感謝を込めて]«などの名詞や、»Danke dir. [ありがとう]«などの動詞、または»Ich wäre Ihnen dankbar; wenn [~をしていただくと有り難いです]«のような形容詞を用いて実現される IFID を 1 つ含んでいた(2 つ含んでいるものも 4% あった)。

ドイツ語では、IFID なしの謝辞は、»Über eine baldige Antwort würde ich mich sehr freuen! [早めにお返事をしてくださると有り難いです]«や»Sie würden mir damit sehr helfen. [そうしてくれることで、非常に助かります]«のような接続形 (conjunctive form) や、»Es wäre toll, wenn Du sie mir (so weit es geht) beantworten könntest. [私の質問に答えてくださると、有り難いです]«のような条件節を用いることによって実現されることが多かった。その他には、»Das wäre super lieb von dir. [親切にありがとうございます]«における主語としての»das«を含む、依頼への前方照応的指示がしばしば見られた。日本語では、感謝の表現は、»Über eine baldige Antwort würde ich mich sehr freuen! [早めにお返事をしてくださると有り難いです]«や»Sie würden mir damit sehr helfen. [そうしてくれることで、非常に助かります]«におけるドイツ語の実例と同様の方法で実現されている。例としては、»ありがたいです。«や»本当に助かる。«が挙げられる。受信者が教師や先輩の場合、日本人は、»いつもお世話になっています。«

という言いまわしを用いることも多く、これに相当するものはドイツ語には存在しない。ドイツ語学習指導の観点からは、学習者が、ドイツ語の依頼のEメールにおいて謝辞の必要性と機能に気づくことが重要である。言語的に実現するために、学習者は、様々な場面や受信者に対して、感謝を表す多種多様な表現を教えられるだけでなく、それらを依頼と接続するための接続形や条件節の使い方についても教えられるべきである。

これらの調査結果は、しばしば観察されるような、テキストを構成する方法における異文化間の差異を明確に示しており、外国語教育にとって意義深いものである。ドイツ語と日本語の依頼のEメールに関しては、日本人のドイツ語学習者は、それらの差異を意識させられるだけで学習を終えるべきでない。つまり、Eメールのそれぞれのテキスト部分を実現するため、学習者は言語的な手段も有する必要がある。以上の本研究における質的な結果に基づいて、ドイツ語学習が目標言語においてより適切に依頼を書くことを手助けするような教材を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

1. Harting, Axel, Textmuster von E-Mail-Bitten in der Fremdsprache Deutsch, Informationen Deutsch als Fremdsprache, 査読有, 印刷中.
2. Harting, Axel, Bitten in E-Mails japanischer Deutschlernender, ビールフェルト大学 博士論文、査読なし.
3. Harting, Axel, 日本語とドイツ語におけるEメールの構造の違い: ドイツ語教育への示唆. 広島外国語教育研究センター紀要、査読有、No. 12, 2009, 121-133.
4. Harting, Axel, Composition of German and Japanese Emails Request, *JALT Proceedings*, 査読有, 2009, 1327-1336.
5. Harting, Axel, ドイツ語と日本語におけるEメールの対照研究: 筆記による依頼のストラテジー. 広島外国語教育研究センター紀要、査読有、No. 11, 2008, 121-131.

6. Harting, Axel, Written Requests in German and Japanese Emails, *JALT Proceedings*, 査読有, 2008, 1023-1032.

[学会発表] (計6件)

1. Harting Axel, Interimsprachliche Charakteristika von E-Mail-Bitten in der Fremdsprache Deutsch; 2009/11/22 Granship Shizuoka.
2. Harting Axel, Composition of German and Japanese Email Requests, JALT 2007 - 34rd Annual International Conference on Language Teaching, 2008/11/11, National Olympics Memorial Youth Center, Tokyo.
3. Harting Axel, Schriftliche Bitten im Kontrast: Deutsch und Japanisch, 第35回日本独文学会言語学ゼミナール, 2007/8/29, Co-op Inn Kyoto 京都.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ハーティング アクセル (Harting Axel)
広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号: 80403509

(2) 研究分担者

吉満 たか子 (YOSHIMITSU TAKAKO)
広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号: 20403511

岩崎克己 (IWASAKI KATSUMI)

広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号: 70232650

(3) 連携研究者